

H-1 塩釜市浦戸寒風沢地区 2011年12月21日(水)

報告者名	相澤 卓郎	被調査者生年	1936年(男)
調査者名	酒井 朋子	被調査者属性	寒風沢区長
補助調査者	相澤 卓郎		

寒風沢の被害の概要および被調査者について

寒風沢地区は浦戸諸島を構成する島の一つで、人口は200人ほどである。この地区も震災により大きな被害を受けている。90戸近くあった家屋の約半数が流出、半壊した。津波による死亡者は3名である。現在は多数の住民が、寒風沢にある旧浦戸第一小学校敷地の仮設住宅や、いわゆる「本土」の仮設住宅に住んでいる。

話者は、塩釜市教育委員会に寒風沢調査の相談を行ったさいに紹介された人物である。津波で自宅が流され、現在は本土の仮設住宅に住んでいる。調査者および補助調査者の2名に教育委員会の方が1名同行し、合計3名で話者の暮らす仮設住宅を訪れ、2時間弱にわたって聞き取りをおこなった。

寒風沢地区には、国・県・市の指定する無形民俗文化財はとくにない。よって、年中行事や生業の様子について全体的に話を聞いた。以下に聞き取りの概要をまとめる。

寒風沢の年中行事

寒風沢には昔から続けられてきた年中行事が多く残っている。それぞれの行事につき毎年当番が決まっており、一つの行事につき5人から7人が当番となり、順番に回っていく仕組みである。

新風講は寒風沢を南・中・北の3区域で構成している葬儀の互助で、1月17日におこなわれる。これは東北地方でみられる契約講と似ている。

12月15日には、秋葉山大権現で火伏の神に火災防止の祈禱をしていた。今では、仕事の都合で人を集めるのが難しく、新風講とまとめてやっしまおうということで、本来の祭日から1月17日にずれ込んでいる。

2月10日には百万祭(念仏講)がある。ここでは先祖の霊を慰めるために念仏を唱える。念仏の唱え方は、高齢の女性が集まって輪をつくり、1本の数珠を回しながら念仏を唱えていく。この、複数回に及んで念仏を唱えていく様子を「百万回念仏を唱える」として百万祭と呼ばれている。

8月29日には施餓鬼供養がおこなわれる。これは海難者の供養で、鐘を鳴らしながら念仏を唱えるものである。寒風沢の区の行事として行っている。施餓鬼供養では灯籠も用意する。寒風沢では150個近くの灯籠を当日に作り上げる。15人前後の役人が、当日の13時くらいから集合して、灯籠ややぐらをすべて作っていくのである。年齢にして50、60くらいの人たちで、熟練工といえるほどの技術である。

これらの年中行事に共通した問題は、高齢化が進み、後継者が見つからないことである。たとえば施餓鬼供養は以前は 30 人ほどで行っていたが、しだいに数が少なくなり、一時期は行事が中止されることもあった。だが重要な伝統行事であるからということで、50 代の人を集め、知っている人に教わるなどして復活させた経緯がある。この後継者不足は津波以前からの大きな問題であり、震災の影響ではない。津波の直接的影響としては、寒風沢漁港の被害などがある。今年も施餓鬼供養を例年通り漁港で行うことができず、松林寺の本堂をかりておこなわれた。また、住宅以外にも祭礼の時に使われる道具を管理していた倉庫も流されてしまっている。

浦戸諸島の過疎化

昭和 36 年には、浦戸諸島全体での人口は 2,000 人近かった。それが今では 600 人未満へと減少している。寒風沢の仕事のほとんどは一次産業になるが、法律の制約をうけてそれも難しくなっている。浦戸諸島でおこなえる漁業は、海苔やカキの養殖など、いわゆる 3K と呼ばれる仕事になってきている。海苔やカキは働きの割には利益が少ない。そのため現在の寒風沢では、本島に働きに行く人が 10 人超いる。

島と本島の行き来も難しくなっている。市の定期船は一時期勤め人が多くなったということで、本数が増え、8 便ほどが運営されていたが、人口の減少と共に便数は減っていき、今回の震災ですますす少なくなってしまった。

島間の交流

島間での交流は活発ではない。上に述べてきた催事も、島内の住人のみでおこなわれる。祭礼のときには岩切の八坂神社から宮司が来るが、基本的にそれ以外のときには宮司はおらず、区長が神社の管理をしている。寒風沢から本島への移住も少なく、また、縁もゆかりもない人が浦戸に来ることも珍しい。

浦戸諸島では一つ一つの島が個々に共同体を作っていて、外部との関わりはあまり持たない。「我が島意識」のようなものを、それぞれがもっている。この「我が島意識」は財産というものに強く表れていて、例えば野々島の人には島外の人に財産（土地）を持っていかれることを強く嫌っていた。また、学校の統合に関しても、親が別の島の子どもと自分の子供が一緒の学校に通うようになることに抵抗を示したという。

このような意識の中、寒風沢はどちらかといえば他の島と交流があったほうだといえる。野々島-寒風沢間で渡し船があったのも一因だろう。また、寒風沢の場合は外部から嫁として入ってくる女性たちも多かった。話者の母親も妻も松島の出身である。

3月11日以降の寒風沢

話者も震災後 2 か月ほどの間は寒風沢の避難所にいた。避難所になったのは旧浦戸第一小学校体育館である。避難所には最大で 160 人くらいの人が寝起きしていた。最後まで避難所に残った 8 世帯の人たちは浦戸第一小学校に作られた仮設住宅に住んでいる。中には、現在家の 2 階を改造して住んでいる人たちもいる。

現在の寒風沢の人たちの暮らしには格差が生じてしまっている。たとえば救援物資は、避難所

から仮設住宅に入った人たちに優先して配られ、自宅に戻った人たちの手にはなかなか届かない。震災後、本島に移っていった人もいるが、地理的距離（物理的距離）の他に人と人の気持ち（精神的距離）が離れてしまい、地域コミュニティに亀裂が入ってしまっている。